

# 大供中道遺跡発掘調査概報

—岡山市公用車立体駐車場建設工事に伴う発掘調査—

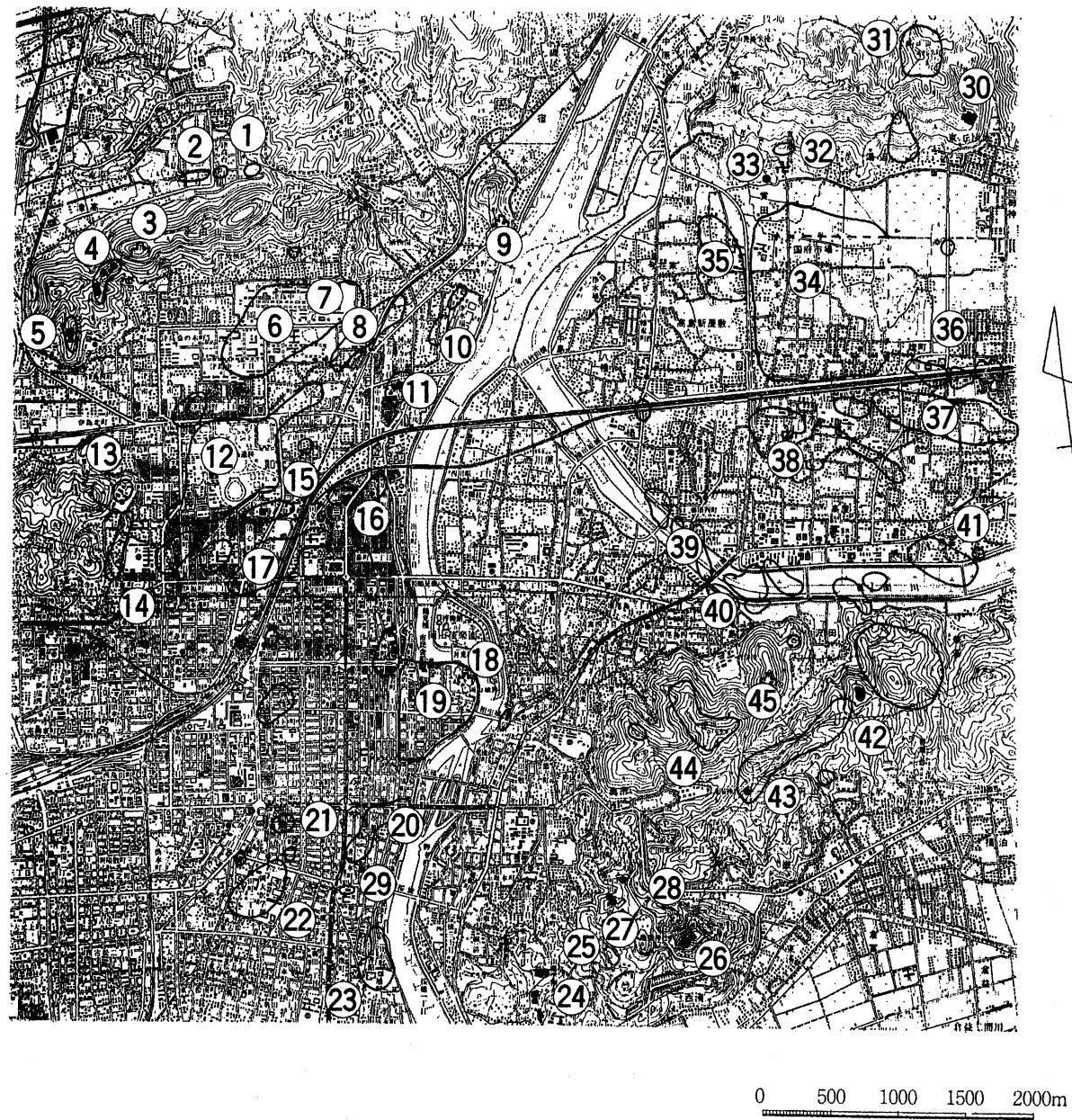
2000年3月

岡山市教育委員会

# 正誤表

ページ	行	誤	正
2	8	大安寺伽藍縁起并流記資材帳	大安寺伽藍縁起并流記資材帳
2	12	開発ををみていた	開発をみていた
2	24	配下に置にいた	配下に置いた
3	図2註	佐良池谷尻古墳	佐良池谷尻古墳群
6	14	試掘壙	試掘坑
9	図5 12B 註	土器再片	土器細片
12	22	土壙	土坑
12	26	鉢型土器	鉢形土器
14	図16	満1 満2	溝1 溝2
15	20	水田おける	水田における
16	参考文献	網野喜彦	網野善彦

図2 周辺遺跡分布図（正）



## 序

我が国は、昭和40年代にはじまる高度成長による経済発展とそれにともなう開発事業により、著しい変貌をとげました。岡山市もその例外ではなく、特に市街地を中心にしてその景観は大きく変わり、その傾向は現在も続いております。そのことはわが市役所の現在の市庁舎が建設された昭和40年代の初め頃と、現在の周囲の景観と比較いたしましても一目瞭然であります。

私たちの生活はそのおかげではるかに豊かになり、便利になりました。このことは非常に喜ばしいことであります。しかし、私たちの現在のこの日々の営みは、何千年も前から続く私たちの先人達の営みの延長上にあることを忘れてはならないと思います。

この度報告いたします大供中道遺跡の調査は、岡山市公用車立体駐車場建設工事に伴い記録保存を実施したものであり、これにより私たちが日頃市政を執り行っています市庁舎の近接地における、先人達による過去の営みの一部が明らかになりました。

発掘調査の成果は対策委員の諸先生方、関係者各位、発掘調査参加者のご指導ご支援の賜物であり、みなさま方をはじめ調査担当者各位に対しまして、こころから謝意を表する次第であります。

この調査における成果に関しましては、ご検討、ご批判をいただき、少しでも岡山の歴史に寄与できるならば幸いに存じます。

平成12年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 戸 村 彰 孝

## 例 言

1. この発掘調査概報は、岡山市教育委員会文化課が平成5年7月27日から10月10日にかけて実施し、岡山市公用車立体駐車場建設工事に伴う岡山市大供1丁目7番123の発掘調査に関するものである。
2. この発掘調査概報の作成は、岡山市教育委員会文化課が実施し、その執筆は河田健司が担当した。
3. 遺物の実測は、河田と、山元尚子が行い、トレース、遺物の写真撮影及び編集は河田が行った。
4. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
5. この報告書に用いている方位は磁北である。
6. 発掘調査に基づく実測図類と写真並びに遺物の実測図・写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

# 目 次

第1章 地理的・歴史的環境 .....	1
第2章 調査の経緯と経過 .....	5
第3章 遺構と遺物 .....	10
第4章 まとめにかえて .....	15

## 図 版 第1～第4

## 挿入図目次

図1 大供中道遺跡の位置 .....	1
図2 周辺遺跡分布図 .....	3
図3 遺跡位置図 .....	7
図4 断面位置図 .....	8
図5 調査区断面図 .....	9
図6 弥生時代後期以前遺構配置図 .....	10
図7 溝-4断面図 .....	10
図8 弥生時代後期遺構配置図 .....	11
図9 古墳時代遺構配置図 .....	12
図10 P-1実測図 .....	12
図11 P-1出土遺物 .....	12
図12 P-2実測図 .....	13
図13 P-2出土遺物 .....	13
図14 溝-3実測図 .....	13
図15 中世面2遺構配置図 .....	13
図16 中世面1遺構配置図 .....	14
図17 近世水田出土遺物 .....	14
図18 調査区周辺の道路図 .....	15

# 第1章 地理的・歴史的環境

大供中道遺跡は、岡山県南に広がる岡山平野の内でも、旭川下流沖積平野（狭義の岡山平野）の旭川右（西）岸の南半に位置している。（本章では広義とつけないかぎり狭義の岡山平野を指す）岡山平野北半部は、旧河道により形成された微高地と後背湿地の入り交じる地帯であり、当遺跡が立地する南半部は旭川によって運ばれたシルトや砂が、河口付近に堆積し形成された三角州地帯である（註<sup>1)</sup>）。当遺跡の、北約4kmのところには、半田山山塊が、東側約2kmのところには旭川をはさんで操山山塊が広がっている。

この地域は古代から近世までは、備前国御野郡に属していたが、近世においては岡山城下町の南西側に西川を隔てて接し、大供村の一部となっており、茶屋や鳥銃薬（火薬）を製造する施設などが存在していた（註<sup>2)</sup>）。明治22年（1889）に、周辺の内田・東古松・西古松・岡の4ヶ村と合併し鹿田村となり大供の地名は大字として残った。その後大正10年（1921）に岡山市に編入合併され現在に至っている（註<sup>3)</sup>）。

岡山平野での人類の営みは旧石器時代にさかのぼり、操山山塊においてナイフ形石器や細石器といった旧石器時代末期の遺物が採取されている（註<sup>4)</sup>）。縄文時代にはいると、旭川右岸地域においては、半田山山塊の南麓に縄文時代中期から後期にかけて営まれる朝寝鼻貝塚や（註<sup>5)</sup>）、後期や晩期を中心とする岡山大学津島遺跡群（註<sup>6)</sup>）、縄文晚期の水田を検出した津島江道遺跡などが形成される。また当遺跡の南400mの鹿田遺跡では、縄文時代の遺構は検出されていないが、縄文中期や晩期の遺物が出土している。（註<sup>7)</sup>）

弥生時代になると、旭川右岸地域においては、当遺跡より北へ3～4kmの半田山山塊南麓およびその周辺の、津島遺跡、津島岡大遺跡、津島江道遺跡（註<sup>8)</sup>）から前期にさかのぼる水田遺構が検出されている。これら前期水田に営まれた水田農耕による生産力の拡大と人口の増加は、弥生時代中期に至つて岡山平野旭川右岸地域において津島遺跡、南方遺跡、などの北半部の拠点集落の発展を促すと同時に、南半部に鹿田遺跡、天瀬遺跡を形成させた。鹿田遺跡の弥生中期後半の集落からは多くの遺構、遺物が出土しており、南半部における中心的集落であったと考えられるが（註<sup>9)</sup>）、その生産基盤である弥生中期の水田は未確認である。弥生後期には、当遺跡との関連が想定される大供遺跡が知られているが、その実体は未確認の状態にある。また鹿田遺跡においては、弥生後期の濃密な遺構・遺物が確認されており、中期に引き続いて旭川右岸平野南半部における中心的な集落であったと思われる。また当遺跡においては弥生時代と考えられる水田も検出されている（註<sup>10)</sup>）。一方弥生後期末以降、旭川右岸の半田山山塊には、弥生墳丘墓である都月坂2号墓や、前期古墳群である七つ塹古墳群等が築かれる（註<sup>11)</sup>）。

これらは旭川右岸地域、おそらく津島遺跡を中心とする集団の首長墓と思われる。これらの首長墓は、古墳時代前期

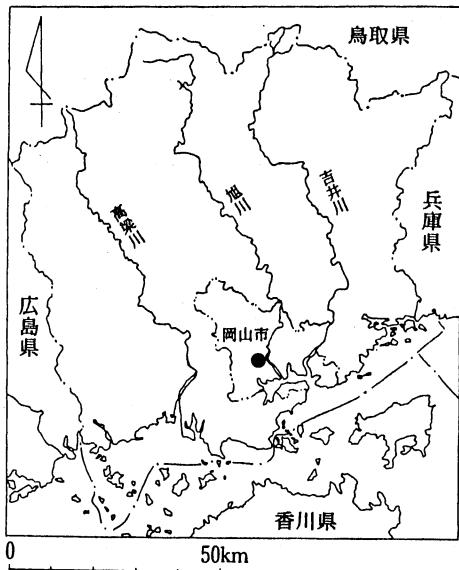


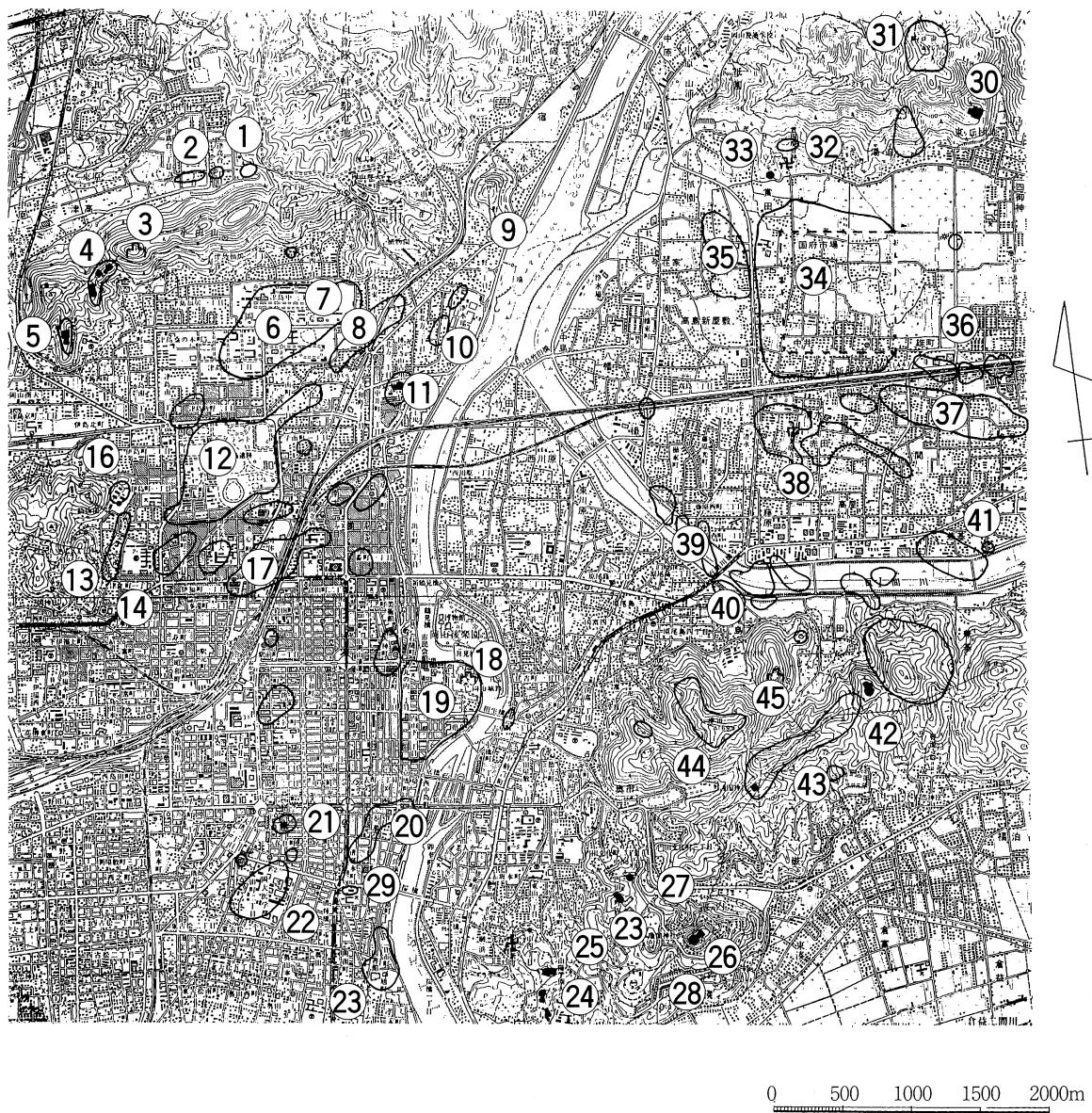
図1 大供中道遺跡の位置

には、前方後円墳・前方後方墳をはじめとした古墳を築造し続けるが、大型前方後円墳は、前期中頃の全長150mの神宮寺山古墳だけである。後期に至ると、平野の中心部に直結した状態での古墳築造が認められなくなり、縁辺部の丘陵に横穴式石室墳の小規模な展開が認められる様相となっている。しかし古墳時代を通じて、中小の古墳は築造され続ける。旭川右岸地域の古墳時代の集落は、津島岡大遺跡、津島江道遺跡、また当遺跡周辺地域の鹿田遺跡において、弥生時代から引き続いだ営まれている。<sup>(註12)</sup>

古代において岡山平野の旭川右岸地域は御野郡に属する。（以下、岡山平野旭川右岸地域に関する記述は御野郡を中心に述べる）古代の御野郡は、奈良時代後半頃から「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」に見られる長江葦原の大安寺領のように、在地勢力ではなく、中央の有力寺院、貴族による開発が、郡域の南西側の干渉地帯においてすすめられていたと考えられる地域である。藤原氏の殿下渡領であり当遺跡が位置すると思われる鹿田荘も<sup>(註13)</sup>、弘仁8年（817）にはすでに藤原氏の殿下渡領になっており、奈良時代後半頃には、郡域の南端の旭川河口周辺に開発をみていたと推測される。これらの荘園は平安時代に至ると、郡域縁辺部においてその経営を拡大させたと思われ、平安時代後期には、郡域の縁辺部一帯に、上記の鹿田荘をはじめとして、大安寺荘、野田保などの荘園が、公領域である出石郷や伊福郷などを取り囲むかたちで存在する状況を呈する。古代における岡山平野の旭川右岸地域の遺構、遺物は、鹿田遺跡や、当遺跡から東南へ700mの新道（清輝小学校）遺跡において検出されている。鹿田遺跡においては奈良時代～平安時代初頭、の井戸、溝、土坑などの多くの遺構と多数の遺物が検出されており、また新道遺跡においては平安時代末期の井戸から「…御庄久延弁」の文字を持つ木簡が出土し<sup>(註14)</sup>、新道遺跡が鹿田荘域に含まれる可能性を示唆している。

中世の御野郡は、平安時代後期以来の郷域（国衙領域）と荘園域の地域区分がそのまま存続し、国衙領を押領しての荘園域の拡大は見られない。また関東武士の入部も確実なのは、同郡伊福郷に地頭職として移住してきた相模国の松田氏だけである。しかし室町時代以降、備前国守護である赤松氏の麾下で、金川城を拠点に勢力拡大をはかっていた上記の松田氏は、御野郡にも勢力をのばし、その支配下に置にいたと考えられる。当遺跡が位置すると思われる鹿田荘も松田氏の支配下に置かれていたとおもわれ、「大乘院寺社雜事記」の文明13年（1481）の記事では、いまだ藤原氏の殿下渡領であるが、年貢は松田氏の請所となっており、この頃には実質的には松田氏の支配下にあったことがうがえる。また「宣胤卿記」の明応6年（1497）の記事には藤原氏の殿下渡領としての鹿田荘の記述が見られるが、これ以降は史料を欠き、名実ともに松田氏の支配下に入ったと思われる。<sup>(註15)</sup> 当遺跡周辺地域における中世の遺構・遺物は、鹿田遺跡や新道遺跡、岡山城二の丸跡<sup>(註16)</sup>などにおいて検出されている。鹿田遺跡では鎌倉時代～室町時代の井戸、溝、土坑などの多くの遺構遺物が検出され大規模な集落の存在が想定されている。

近世に至ると岡山平野では、干拓による大規模な開発が進められる。また戦国時代を通じて御野郡の支配者であった松田氏を、永禄11年（1568）に滅ぼし、御野郡を支配下に納めた宇喜多直家は、天正元年（1573）、石山の城（前岡山城）にはいり、新たに築城するとともに、周囲に城下町を建設した。近世以降、当遺跡の立地する周辺は岡山城下町に接する村方域に位置づけられて大供村となり、田園地帯となっていた。そして近代に至り岡山市に合併された後徐々に市街化が進み、現在に至っている。



- |                     |                    |                    |
|---------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 佐良池谷尻古墳（古墳後期）    | 16. 広瀬遺跡（弥生）       | 31. 龍ノ口山頂古墳群（古墳後期） |
| 2. 佐良池古墳群（古墳後期）     | 17. 南方遺跡（弥生他）      | 32. 賞田廃寺（飛鳥～中世）    |
| 3. 半田山城（戦国）         | 18. 岡山城（戦国～江戸）     | 33. 唐人塚古墳（古墳後期）    |
| 4. 都月坂墳墓群（弥生後～古墳前期） | 19. 岡山城関連遺構（戦国～江戸） | 34. 備前国府推定地（古墳前他）  |
| 5. 七つ块古墳群（古墳前期）     | 20. 天瀬遺跡（弥生中・後期）   | 35. 備前国庁跡（古代他）     |
| 6. 津島岡大遺跡（縄文～古代）    | <b>21. 大供中道遺跡</b>  | 36. 雄町遺跡（縄文晩～平安）   |
| 7. 朝寝鼻貝塚（縄文中期他）     | 22. 鹿田遺跡（弥生他）      | 37. 乙多見遺跡（弥生他）     |
| 8. 津島江道遺跡（弥生他）      | 23. 二日市遺跡（弥生から江戸）  | 38. 幡多廃寺（奈良～中世）    |
| 9. 妙見山城（戦国）         | 24. 操山109号墳（古墳前期）  | 39. 百間川原尾島遺跡（弥生他）  |
| 10. 北方長田遺跡（弥生他）     | 25. 網浜茶臼山古墳（古墳前期）  | 40. 百間川沢田遺跡（弥生他）   |
| 11. 神宮寺山古墳（古墳前期）    | 26. 湊茶臼山古墳（古墳前期）   | 41. 百間川兼基遺跡（弥生他）   |
| 12. 津島遺跡（縄文・弥生他）    | 27. 操山106号墳（古墳前期）  | 42. 金蔵山古墳（古墳前）     |
| 13. 上伊福西遺跡（弥生他）     | 28. 操山103号墳（古墳前期）  | 43. 旗振台古墳（古墳前期）    |
| 14. 上伊福遺跡（弥生他）      | 29. 新道遺跡（古代他）      | 44. 操山古墳群（古墳前期～後期） |
| 15. 絵団町遺跡（弥生他）      | 30. 備前車塚古墳（古墳前期）   | 45. 明禪寺城（戦国）       |

図2 周辺遺跡分布図

(註)

1. 高橋達郎「地形環境」『岡山県史 第1巻 自然風土』岡山県史編纂委員会 1983
2. 「吉備温古秘録 郷莊」『吉備群書集成 7』吉備群書集成刊行会 1970
3. 岡山市地名研究会編「岡山市の地名」岡山市 1989
4. 鎌木義昌「無土器時代の岡山」『岡山市史 古代編』岡山市 1962
5. 「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県 1986
6. 「津島岡大遺跡第11次調査」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1996
7. 「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
8. 草原孝典「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1997（平成9年度）』岡山市教育委員会 1997
9. 山本悦世「鹿田遺跡における集落構造とその変遷」（「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊』）
10. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1999
11. 5前掲書による
12. 9前掲書による
13. 藤井駿「岡山周辺の諸莊園」『岡山市史 産業経済編』岡山市 1966
14. 岡山市教育委員会草原孝典氏にご教示を得た
15. 出宮徳尚「歴史的環境」『史跡保存整備事業史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997
16. 神谷正義・河田健司「岡山城二の丸（中電変電所）跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1996（平成8年度）』岡山市教育委員会 1998

(参考文献)

- 「鹿田遺跡Ⅳ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997  
「津島岡大遺跡第11次調査」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1996  
「津島岡大遺跡第3次調査」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992  
「津島岡大遺跡第10次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994  
近藤義郎・河本清編「吉備の考古学」福武書店 1987  
近藤義郎編「岡山県の考古学」吉川弘文館 1987  
間壁忠彦・間壁葭子「日本の古代遺跡 23 岡山」保育社 1985  
榎原雅治「備前国」『講座日本莊園史9 中国地方の莊園』網野善彦他 吉川弘文館 1999  
中野栄夫「莊園制社会の成立」『岡山県史 古代Ⅱ』岡山県 1989  
藤井駿・水野恭一郎「中世における産業経済の発達」『岡山市史 産業経済編』岡山市 1966

## 第2章 調査の経緯と経過

### 調査の経緯

平成4年7月6日付け管財府建内第68号で、岡山市財政局管理部管財課より岡山市教育委員会文化課あてに、岡山市大供1丁目7-123岡山市分庁舎等建設事業に伴う岡山市公用車立体駐車場建設予定地に対する、埋蔵文化財存在状況確認調査の依頼が提出された。

これをうけた文化課では、同年8月24日に建設予定地において確認調査を行った結果、南北2ヶ所に設定した試掘坑から、現地表面より-140~160cmの部分に2層の包含層を確認し、埋蔵文化財包蔵地であることが明らかになった。そこで当該地の大字名である大供、小字名である中道を探り、大供中道遺跡とした。

確認調査の結果から、設計変更などにより遺跡の保存をはかることは不可能であると判断されたため、岡山市教育委員会文化課と岡山市財政局管理部管財課との間で協議が行われ、岡山市公用車立体駐車場建設予定地222.613m<sup>2</sup>について、平成5年度中に発掘調査を実施することで合意し、翌年4月16日付けで岡山市長より文化庁長官あてに、文化財保護法57条の3第1項の規定により、埋蔵文化財発掘通知が提出された。

同年4月20日付けで岡山市教育委員会教育長より文化庁長官あてに、文化財保護法第98条2第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘の通知を提出した

以上の経緯により、調査は平成5年7月27日から同年10月10日まで行われた。

### 発掘調査組織

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長 奥山 桂
発掘調査対策委員	西川 宏（山陽学園教諭） 西原禮之助（岡山市文化財保護審議会会長〔故人〕） 間壁 忠彦（倉敷考古館館長） 水内 昌康（岡山市文化財保護審議会副会長）
発掘調査担当者	青山 淳（岡山市教育委員会文化課長） 出宮 徳尚（岡山市教育委員会文化課課長補佐） 根木 修（岡山市教育委員会文化課文化財係長） (調査員) 神谷 正義（岡山市教育委員会文化課主任） (調査員) 河田 健司（岡山市教育委員会文化財保護主事） (経理) 沼 智恵（岡山市教育委員会文化課主事）

発掘調査作業員	阿部志真子 佐藤 保 山口 正康
	岡嶋 隆司 鈴木 孝子
	石井 基 松本 晃
	佐々木龍彦 水内 汲子

発掘調査現場事務員 小林 玲子 名座 和枝

出土遺物整理作業員 山元 尚子

調査に当たり当発掘調査対策委員の西川宏、西原禮之助、間壁忠彦、水内昌康の各氏をはじめ、関係者の方々からの多大なるご指導ご助言をいただいた。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

## 調査の経過

当該地は市街地の中にあり、また地盤が軟弱であったため、矢板の打設作業および調査に伴う掘削により周囲の建物に影響を及ぼすおそれがあった。そのために周囲の建物の壁面を補強する作業を行った。その後調査区の周囲に矢板を打ち込みさらにその矢板を鉄骨の梁で東西に補強する工事を行った。さらに調査区内部のスラグからなる、戦後の造成土およびその下部の空襲時の焼土層を重機で除去した。

それらの作業が終了した後、7月23日に調査区外周にグリッド杭の設置を行ない、7月27日よりまず梁で南北に仕切られた調査区の南側の試掘壙内の廃土除去と、現代水田土層の掘り下げから発掘作業を開始した。発掘作業は基本的に何層もの水田耕土層を掘り下げることが中心となった。8月、9月中は雨天の日が非常に多かったこともあり、調査は大幅に遅れた。この間、8月5日に不発焼夷弾が発見され、その処理のために半日作業が中断された。また8月18日には調査区内にグリッド杭を追加した。

9月13日には弥生時代後期水田を覆う洪水砂層上の遺構を検出し、9月20日には洪水砂の下から弥生後期水田の畔を検出した。この段階で9月22日に発掘調査対策委員会を開催した。さらに9月29日には弥生後期水田耕土を掘り下げ、弥生時代後期以前の溝を検出した。その後10月6日にはほぼ調査を終え、10月10日に器材を搬出して作業は終了した。

## 発掘調査日誌抄

1993年7月23日 発掘機材の搬入

7月27日 調査開始。南側部分の調査区掘り下げ

8月5日 調査区内より不発焼夷弾が見つかり、その処理のため作業中止

8月11日 中世面2の精査

8月18日 グリッド杭を追加

8月19日 中世面2の掘り上がり状況写真撮影

8月24日 中世面1の精査

8月26日 中世面1の掘り上がり状況写真撮影

9月13日 南半部古墳時代前期面の精査

9月20日 北半部弥生時代後期面の精査

9月22日 発掘調査対策委員会開催

9月24日 北半部弥生時代後期面掘り上がり状況の写真撮影

9月28日 南半部古墳時代前期の遺構写真撮影

- 9月29日 北半部弥生時代後期以前面精査。

10月4日 南半部弥生時代後期面精査。

10月5日 北半部弥生時代後期以前面掘り上がり状況写真撮影。南半部弥生時代後期面掘り上がり状況写真撮影。

10月6日 南半部弥生時代後期以前面精査。弥生時代後期以前面掘り上がり状況写真撮影

10月10日 発掘機材搬出。調査終了

## 調査区及び土層の概要

当発掘調査の調査区は、南北にのびる道路脇の13.5m×34.5mの敷地内の9.33m×29.73mの南北に長い立体駐車場建物本体の基礎部分である。調査面積は222.613m<sup>2</sup>をはかる。

土層の堆積は、現地表面から約1mの深さまで、戦後の造成によるものと考えられるスラグおよび焼土の混じる造成土層があり、その下から標高1.00m付近までは、数層にわたり水平堆積をなす。この土層は基本的には何層にもわたる水田土層であると考えられるが、層によっては溝-1、溝-2が掘り込まれていたり、また畦畔がみられる部分もある。（第2A層・第3層・第4A層）。標高1.00m付近から、調査区南西隅から南西方向へのびると思われる微高地端部が現れるが（第13層）、そのわずかな部分を除いて基本的に同様の水平堆積を繰り返す。

標高0.8~0.9m付近から、南西微高地端部を除いて全面が洪水砂に覆われるが（第6A・第6B層）、第6A層上にはP-1、溝-3等の古墳時代前期の若干の遺構が形成される。この洪水砂内に



図3 遺跡位置図

は、微高地端部周辺には若干の弥生後期から古墳前期にかけての土器細片を含む。この洪水砂の下、標高0.7m付近は弥生後期末の水田土層であり畦畔を伴う（第7A層）。耕土の厚さは約10cm～15cmをはかる。この水田土層の下、標高0.6m付近からは、シルト微砂層に変わり、溝-4を伴う弥生後期以前の形成層になる（第8層）。第8層から下の第9層～第12層は無遺物層である。

これらの各土層あるいは遺構に含まれる遺物は大変少ないが、含まれて

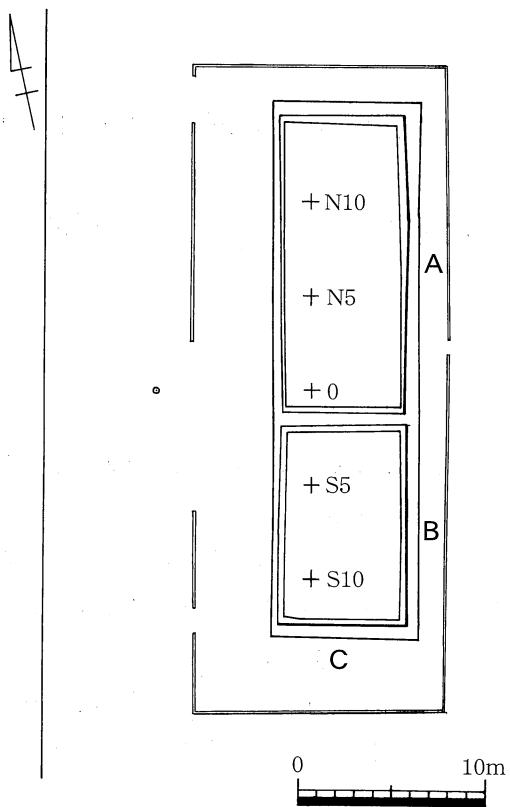
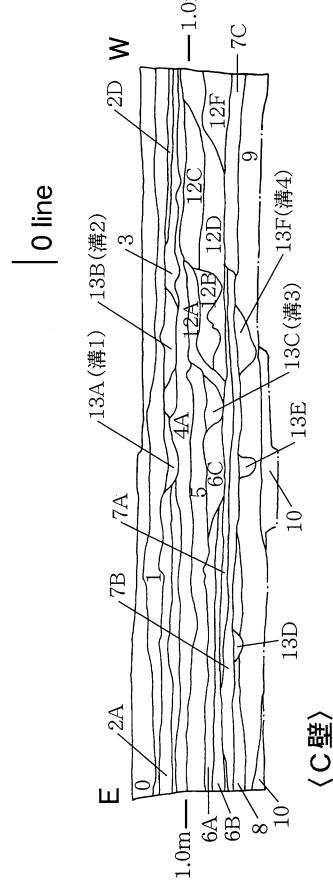
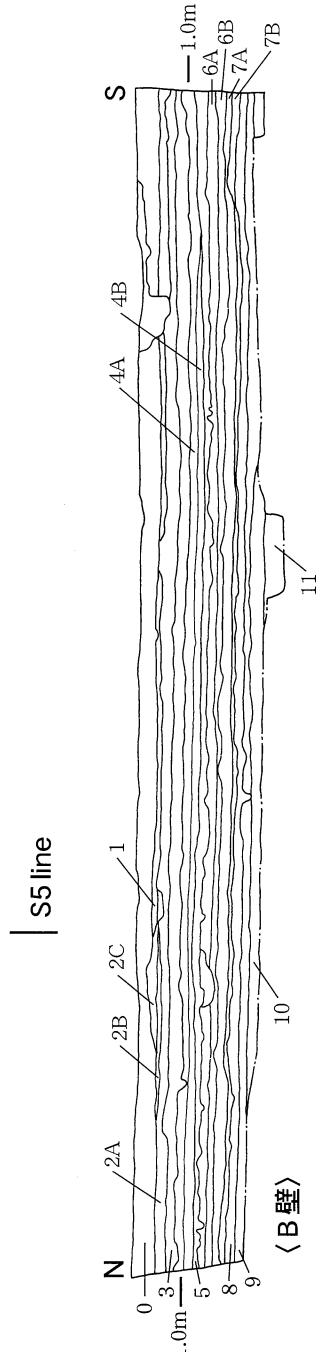
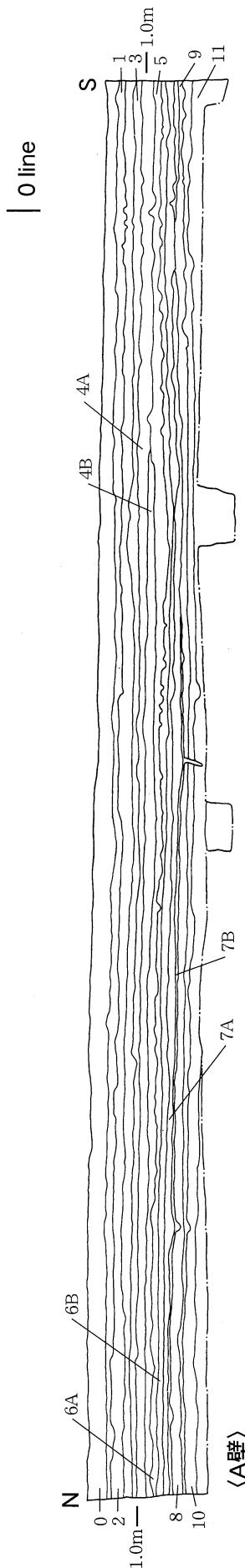


図4 断面位置図

いるわずかな遺物からみると、第0層は近世から近代、第1層は近世後期、第2層は中世、第3層は中世、第6層は古墳前期以前の洪水砂、第7層は弥生後期末と思われる水田耕土層、第8層は弥生後期以前の形成層となる。なお9・10・11・12層は自然堆積層、5層は遺物はほとんどないが、断面から6世紀の須恵器片が出土しているため、古墳時代後期の可能性がある。



淡褐色茶色茶色粘微砂(やや有機質で汚れたよううす茶色を帶びる)  
褐黃茶色微砂(この層の中に褐色鮮介分集積層が2~3箇みられる)

2 B	灰青色粘土 (この音節に鳥の歌の音)
2 C	粘土質灰青色砂質土 (この音節に鳥の歌の音)
2 D	粘土質灰青色砂質土 (この音節に鳥の歌の音)
3	灰褐色粘土質微砂 (上半に鉄分が下半にゴミが沈着する)
4 A	灰褐色粘土質微砂 (鉄分のうん寢が沈着する)
4 B	灰褐色粘土質微砂 (粘性が強く有機質で汚れている)
5	黒茶色粘土質微砂 (粘性が強く有機質で汚れている)
6 A	灰白色粘土質微砂 (粘土が多く含まれる)
6 B	淡褐色粘土質微砂 (有機質が分解する)
6 C	褐褐色粘土質微砂 (粘性が強く有機質で汚されている)
7 A	黑色粘土 (有機質が分解して土壌土質へなる)
7 B	黑色粘土 (有機質が帶状に沈着する)
7 C	黑褐色粘土質微砂 (鉄分が帶状に沈着する)
8	黑褐色粘土質微砂 (薄一薄表面)
9	灰黑色粘土質微砂 (有機質分解層)
10	灰黑色粘土質微砂 (他層より堅い)
11	灰褐色粘土質微砂 (土器等に入れる)
11A	黑褐色粘土質微砂 (他の層より粘性が強い)
12	黑褐色粘土質微砂 (他層より粘性が強い)
12C	灰褐色粘土質微砂 (粘性がつよい)
12D	灰褐色粘土質微砂 (12Cより粘性がよい)
12E	灰褐色粘土質微砂 (12Dより粘性がよい)
13 A	灰青色粘土質土 (溝一厚土)
13 B	灰青色粘土質土 (溝一厚土)
13 C	黑褐色粘土質土 (溝一厚土)
13 D	黑色粘土 (溝一厚土)
13 E	灰青色粘土質土 (造構理土)
13 F	黑色粘土 (造構理土)

図5 調査区断面図

## 第3章 遺構と遺物

### 1. 弥生時代後期以前の遺構（図6）

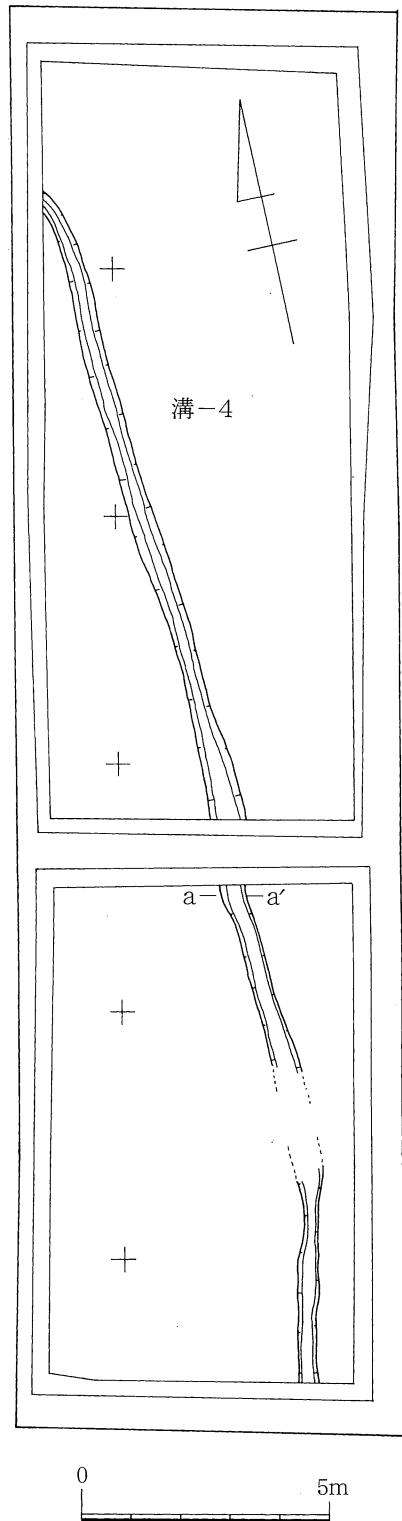


図6 弥生時代後期以前遺構配置図

土層図では第8層で、弥生後期水田の基盤層に相当する。全体に灰色の細砂がひろがっている。標高0.65m～0.55mをはかり、溝-4を1本検出した。この溝以外に遺構は見られずこの面での遺物もほとんど見られない。時期は遺物がほとんど検出されなかつたため不明であるが、第7層が、百間川遺跡群の弥生後期末の洪水で埋没した水田層と同時期のもの可能性が高いため、弥生後期以前のものと考えられる。

### 溝-4（図7）

調査区を南北に貫く溝である。検出面は0.65m～0.55mである。北側ではほぼ南北の軸にそっているが、南側では試掘坑を境に西側へ若干向きを変えて流れる。断面はほぼU字型であるが、途中で若干段がつく部分もある。残存する深さは5cmから10cm程度でばらつきがあるが、底の部分のレベルは南側の部分が10cmほど急に深くなっている。2層ある埋土の内①層の土は、上層の弥生後期水田の耕作土と同じものであることから、水田開発の直前まで機能していたあるいは水田開発に伴う溝と考えられる。遺物は全く出土していないが、一応弥生後期以前としておきたい。

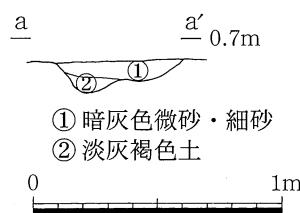


図7 溝-4断面図

### 2. 弥生時代後期の遺構（図8）

土層図では、第7層とした面であり、第6層の洪水砂に覆われた層である。標高は、0.80m～0.70mを計る。第6層の洪水砂を丁寧に除去したところ、標高0.80m付近から水田に伴う畦畔を3本検出した。第6層上では調査区の南西隅に現れていた微高地の下に、水田耕土と思われる7C層が入り込んでいるため調査

区全面が水田化されていたようである。耕土はシルトあるいは微砂がまじる砂質がかたものであり、水田面の高さは標高0.75m～0.70m程度で、南東に向かって若干低くなつて行く傾向がみられる。遺物は少量の土器細片が出土しているが図化できるものはなかった。時期は、覆われている洪水砂の上に古墳時代前期の遺構が営まれていることから、弥生後期後半に埋没したものと考えられる。

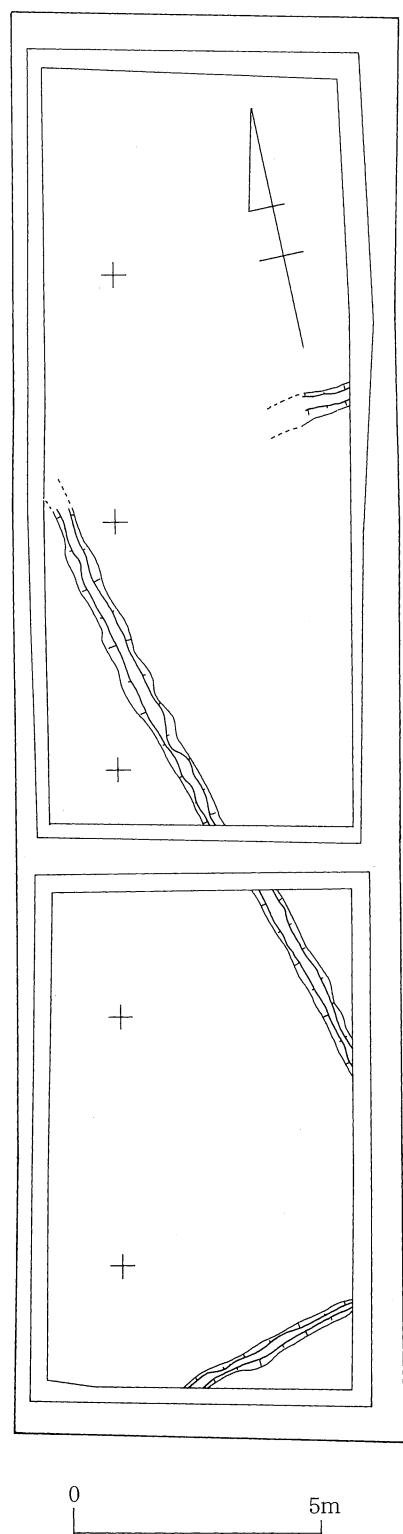


図8 弥生時代の後期遺構配置図

### 畔状遺構

上面の洪水砂6A、6Bを除去した段階で検出された水田畦畔である。南北方向にやや西に角度をふつてのびるものが1本とそれに対して直角方向にのびるものが、調査区南端と北側の中央あたりにそれぞれ一本見られる。基本的に水田耕土（7A層）と同じ土で形成されている。幅は35cm～50cm高さは3cm～5cmが残存しており、断面はカマボコ形を呈する。1枚の水田の規模は調査区がせまいため明らかではないが、復元すると少なくとも一辺が17mをはかる、方形の水田であったと考えられる。

### 3. 古墳時代前期の遺構・遺物

この遺構面は前述の弥生後期水田を覆っている洪水砂の直上に形成されたものである。標高は0.90m～0.80mをはかる。調査区の南西隅に南西方向にのびると思われる微高地端部がある。微高地端部上では遺構は確認できなかつたが、その周辺には溝を中心に、いくつかの遺構を検出することができた。（図9）いずれも浅くあまりしっかりしたものではなく、第5層の水田開発時にかなり削平をうけているようである。またこの周囲には土器片が多く散っていたが、厚く堆積しているのではなく、同じレベルで平たく堆積をしており摩滅もいちじるしい。調査区の北半部は遺物も見られず、遺構も全くなかった。南半部から検出された遺物の時期から、この遺構面は古墳前期の範囲にはいると考えられる。

#### P-1 (図10、図11)

調査区南側の微高地端部の北側で検出された直径25

cmの円形をしたピットと推測される。検出面は0.80m付近であり深さは約6cm、断面型は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色土が1層であり、溝3の埋土と似たものである。遺物は埴が1点つぶれた状態で

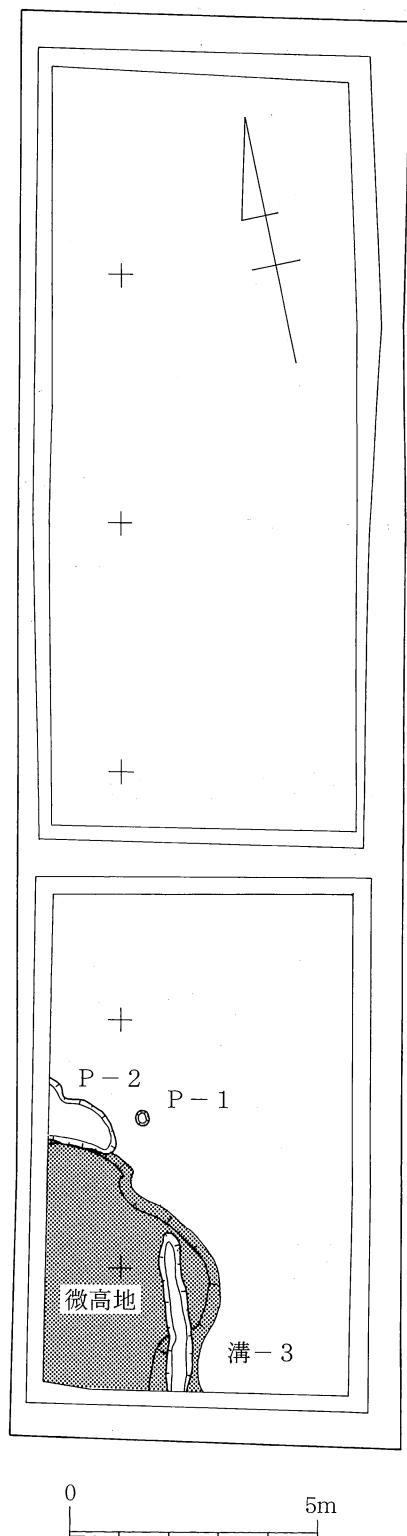


図9 古墳時代遺構配置図

検出されている。

埴は、口径6.4cm胴部最大径10.6cm、器高8.5cmをはかる。外面頸部以下ヨコミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、頸部ユビオサエそれ以下はナデである。黄橙色を呈し焼成は良好。胎土には0.5mm以下の長石粒、赤色粒を含む。時期は古墳前期と考えられる。

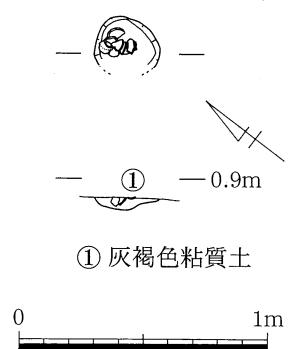


図10 P-1 実測図

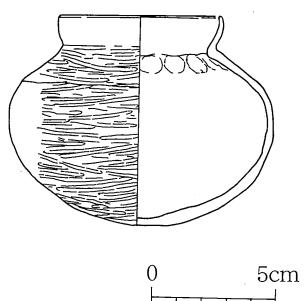


図11 P-1 出土遺物

#### 調査区南側の西端

で検出されたピットである。西側は調査区域外のため全体の規模は不明であるが幅約90cm、長さ140cm以上の長楕円形の平面形と推測される。土壤ではなく西にのびる溝の可能性もある。検出面は0.80m付近で深さ3cmから5cmをはかる。断面型は浅い皿状を呈する。遺物は埋土の中程に落ち込む形で、土器片が含まれていた。図化できたのは鉢型土器1点である。

鉢形土器は、口径15.2cm、底径2.5cm、器高5.5cmをはかる。調整は全面摩滅しており不鮮明である。淡黄灰色を呈し焼成は普通、胎土はややあらく感じられる。時期は器形から古墳前期と考えられる。

#### 溝-3 (図14)

調査区南側で、わずかに微高地端部に入り込むかたちで検出された南北にのびる溝である。幅は約50cm、長さは3.2mをはかるが、南側は調査区外であり全体の様子は不明である。検出面は0.80m付近であるが、P-1・P-2に比べ2cmほど高いレベルで検出されて

いる。深さは約5cmで、断面型は皿状を呈する。埋土は1層で、P1と似たものである。遺物は、検出面と同レベル付近で検出されており遺構に伴うものではない。細片ばかりで図化できるものはなかった。レベルや埋土の様子などから、P1と同時期であると考えられる。

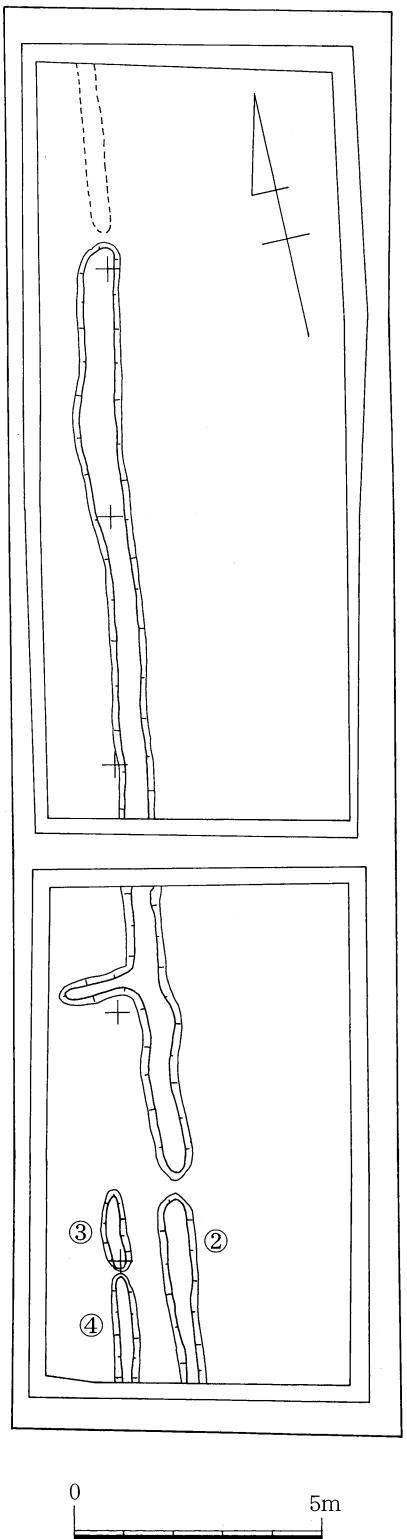


図15 中世面2遺構配置図

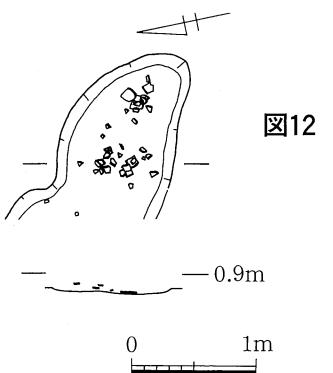


図12 P-2実測図

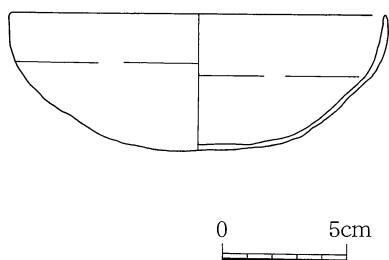


図13 P-2出土遺物

#### 4. 中世の遺構

##### 中世面2(図15)

中世の範疇にはいると考  
えられる遺構面である。こ  
の面からは、畦畔と思われ  
る遺構が1.15m～1.1mあた  
りから検出されている。畔  
①は調査区を南北に走り、  
調査区の北側では途中で途  
切れるが、その先にも同じ  
方向で畔があった痕跡が見  
られる。幅は75cm～100  
cm、高さは3cm～5cmをは  
かり、調査区南側ではそれ  
に直角に西側へのびる畔が

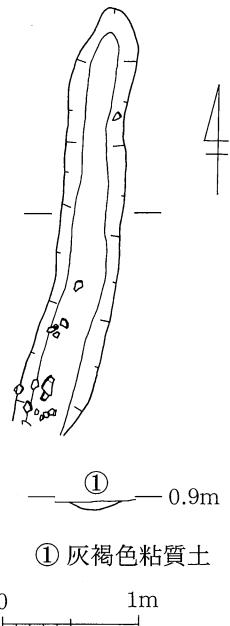


図14 溝-3実測図

とりつく。畔②は調査区南側で畔①と約30cm離れて同じ方向にのびる。規模は①と同じである。畔③と④は、畔①と約50cm離れて平行にのびる。幅は約50cm高さは3cmをはかる。畔①と②、畔①の西へのびる部分の調査区の壁の手前で切れている部分は水口と思われる。水田の耕作面は1.1m~1.0mをはかる。畔は断面カマボコ型を呈し、高さは約5cmである。水田耕土に若干ふくまれている土器は細片が多く図化できるものはなかった。時期は鎌倉時代頃と推測される。

### 中世面1（図16）

中世の範疇にはいると考えられる遺構面である。検出面は1.3m~1.2mである。遺構は溝1、溝2が平行してほぼ南北に走りその東側に多くの凹凸がみられる。溝の埋土は両方とも灰青色粘質土で、深さ約10cmをはかる。この溝は便宜上番号をつけたが、溝の埋土が検出面の土質とほとんど差異がなく、明確な堀方を持たないことや、中世面2の畦畔状遺構と方向が一致し、畦畔①・②の両側、あるいは畦畔②と③・④の間を走っているため、人為的なものではなく下の遺構の影響で窪んだものと考えられる。時期は室町時代と思われる。

## 5. 近世以降

近世の遺構は検出されていない。近世に属する遺物は第1層以上から出土している。水田耕土層のため細片が多く図化できるものは少ないが（図17）、陶磁器の文様から見て、18世紀から19世紀のものが多いようである。図17の①は備前焼のひれ付き灯明皿である。口径は10.8cm器高は推定1.6cmをはかり、暗赤褐色を呈する。19世紀のものである。②は染め付けの小型の丸碗である。直径7.7cm器高は3.9cm高台径は2.8cmをはかる。外面底部に2本の圈線が巡り、コンニャク印版を施す。18世紀のものである。

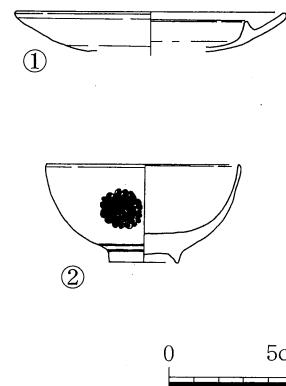


図17 近世水田出土遺物

1層の上層の水田耕土からも近世陶磁器片は出土しているが、近代と思われる遺物と混在している。戦時中の不発焼夷弾はこの層から入り込んでいる。

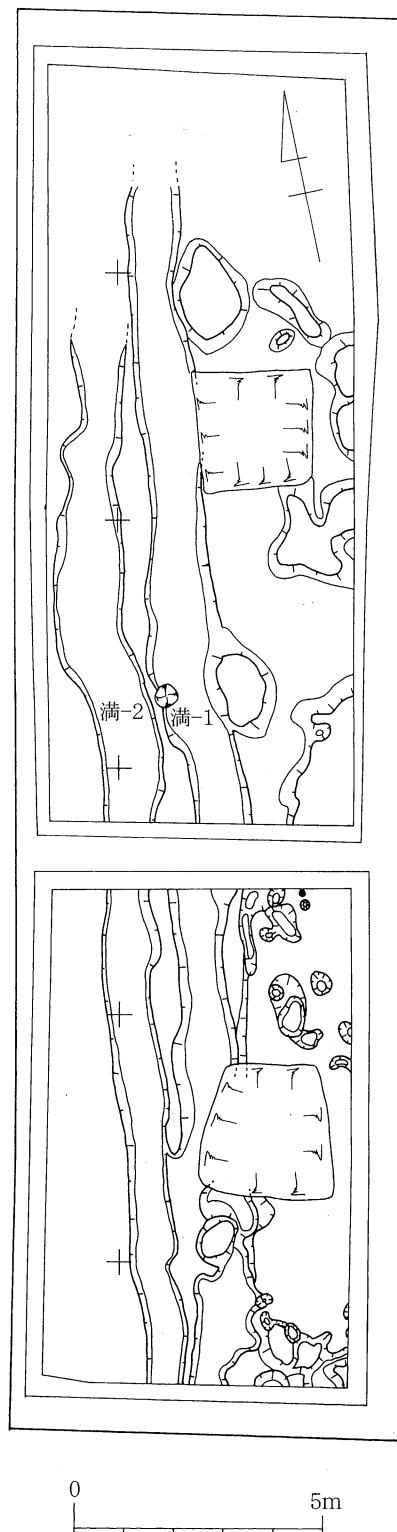


図16 中世面1 遺構配置図

## 第4章 まとめにかえて

今回発掘調査を行った岡山市大供は、かつて弥生後期の遺物が出土しており<sup>(註1)</sup>大供遺跡として知られていたが、本格的な発掘調査は実施されておらず、遺跡の具体的な様相については不明であった。今回の調査は、面積も狭くまた遺構密度や遺物の量も少なかったが、当該地の過去の様相をある程度明らかにすることことができた。以下にそれぞれの遺構面について検討した事項を簡単にまとめてみた。

## 1. 弥生時代の水田について

当遺跡から検出された水田遺構は、水田層を覆っている洪水砂（第6層）および水田耕土層からは時期を明確にする遺物は出土しなかったが、水田面を覆う洪水砂の上面には古墳時代前期の遺構が検出されており、これが水田遺構の時期の下限を示していると思われる。このことから、この水田遺構は弥生時代後期のものと推測される。水田耕土の下には水田層は見られないことから、当該地では弥生後期に至り、水田開発がなされたものと考えられる。

当遺跡周辺地域は、該期の水田遺構はこれまで検出例がなく、また当遺跡の近辺に位置する、鹿田遺跡、天瀬遺跡の該期の集落は、製塩土器、土錘、石錘などの存在から、漁労、製塩などの、海

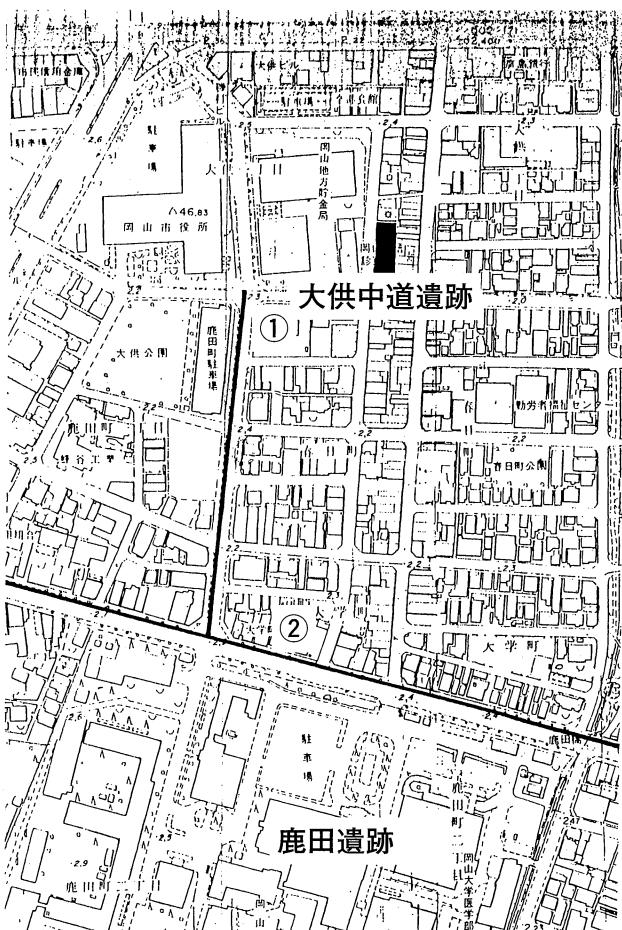


図18 調査区周辺の道路図

における生産活動に重点を置く集落であると考えられていたことから、食料生産の場の中心を海に置く臨海性の地域であると考えられていた。しかし今回の調査で、当遺跡において弥生後期と推測される水田遺構が検出されたことから、当遺跡周辺地域は、弥生時代後期には水田開発が及び、水田における食料生産活動も行われていたことが推測される。

## 2. 中世水田の畦畔について

中世水田に伴う畦畔は、中世面1とした遺構面より検出されており、水田耕土からは13世紀の土器の細片がわずかにみつかっているため、すくなくともこのころ以降の水田と考えられる。

この畦畔ののびる方向は鹿田町一丁目と春日町の境界となっている道路（①）の方位とほぼ一致するが、春日町と大学町の境界となっている道路（②）より南の地域の、南北方向に走る道路の方位とは異なつ

ている。

春日町と大学町との境界となっている道路より南の区画には鹿田遺跡があり、古代末から中世にかけての遺構が多く検出されている。山本悦世氏は、鹿田遺跡3次調査により検出された、古代末から中世にかけての集落を、建物の棟方向からA群（棟方向N-90°～99°-E）とB群（棟方向N-100°～107°-E）に分類している。A群は真北に近い棟方向を持ち、B群は軸を徐々に東に振り現在の敷地の制約に近い値になっていることを指摘している。また鹿田遺跡の一次調査においても、古代末から中世にかけての建物がこの二種類の棟方向を持つこともあわせて指摘されている（註3）。

当該地から検出された13世紀の畦畔の延びる方向はN-6°～8°-Eを示しており、この値は上記のA群の棟方向と直交する方向すなわちN-0°～10°-Eの範囲に収まると考えられる。このことから当該地の畦畔ののびる方向、すなわち磁北から東に振ったライン（N-6°～8°-E）は、中世における当遺跡や鹿田遺跡の周辺地域の、南北方向の基準となったラインであることが推測される。

#### （註）

1. 鎌木義昌「弥生文化の統一」『岡山市史 古代編』岡山市 1962年
2. 『南方釜田遺跡現地説明会資料』岡山市教育委員会 1987
3. 山本悦世「鹿田遺跡古代末～中世集落について」『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990

#### （参考文献）

- 佐藤和彦「莊園絵図研究の軌跡」『莊園絵図研究』東京堂出版 1982  
鹿田遺跡4『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997  
鹿田遺跡。『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988  
金関恕・佐原真「生業」『弥生文化の研究2』雄山閣 1988  
網野喜彦他「中国地方の莊園」『講座日本莊園史』吉川弘文館 1999  
永山卯三郎「岡山縣農地誌」世界聖典刊行協会 1979  
大塚初重他「考古学における日本歴史2 産業1」雄山閣 1996  
岡山市地名研究会編「岡山市の地名」岡山市 1989  
丸山幸彦「東大寺領莊園の変遷」『古代の地方史、山陽・山陰・南海編』朝倉書房 1977

図版第1

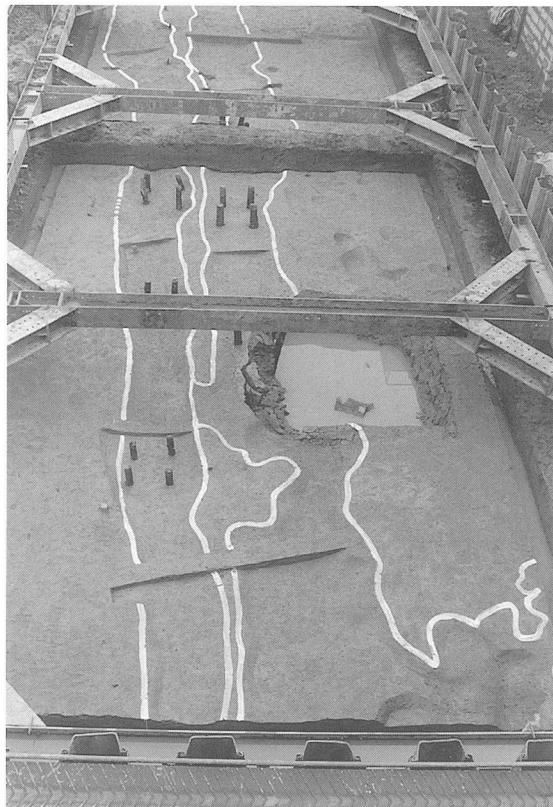


遠 景（南西から）

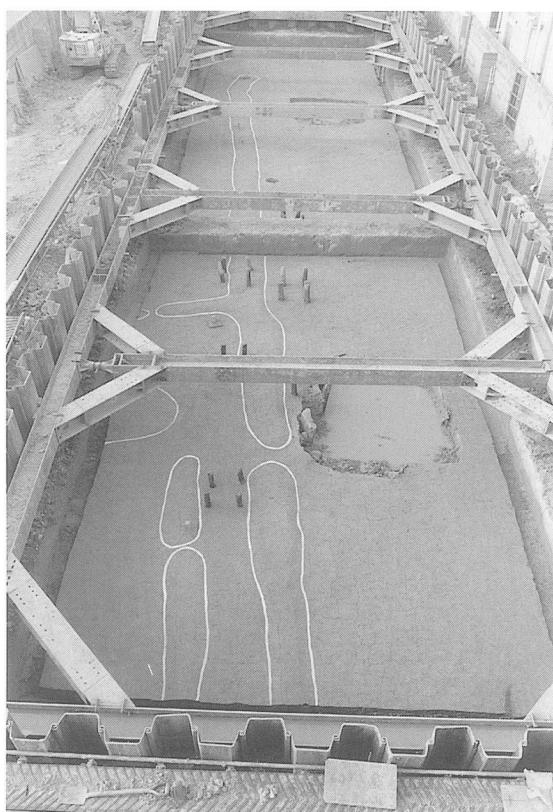


不発焼夷弾処理状況

図版第2

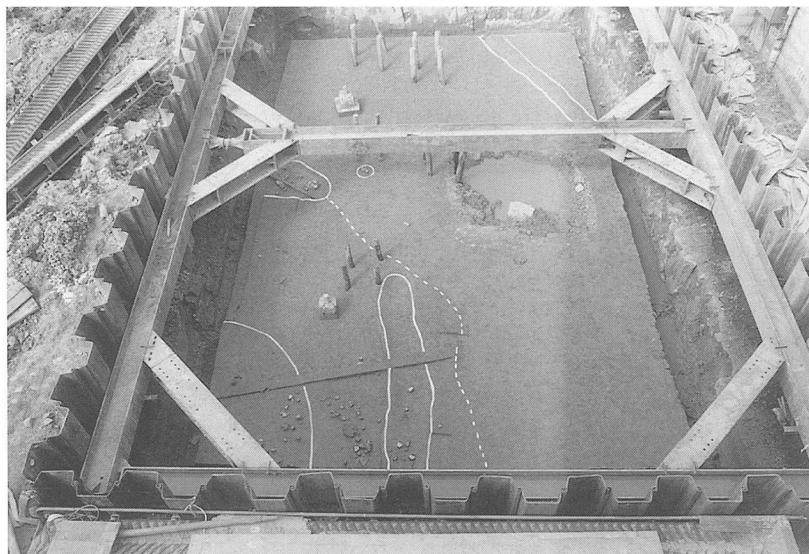


中世面1（南から）



中世面2（南から）

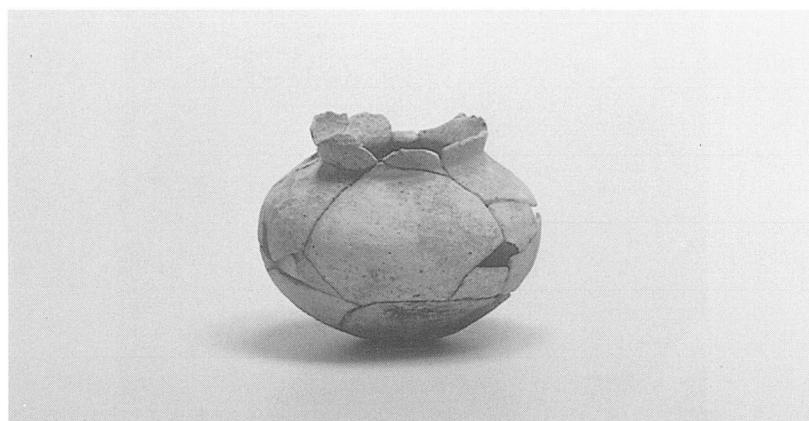
図版第3



古墳前期面（手前・南から）

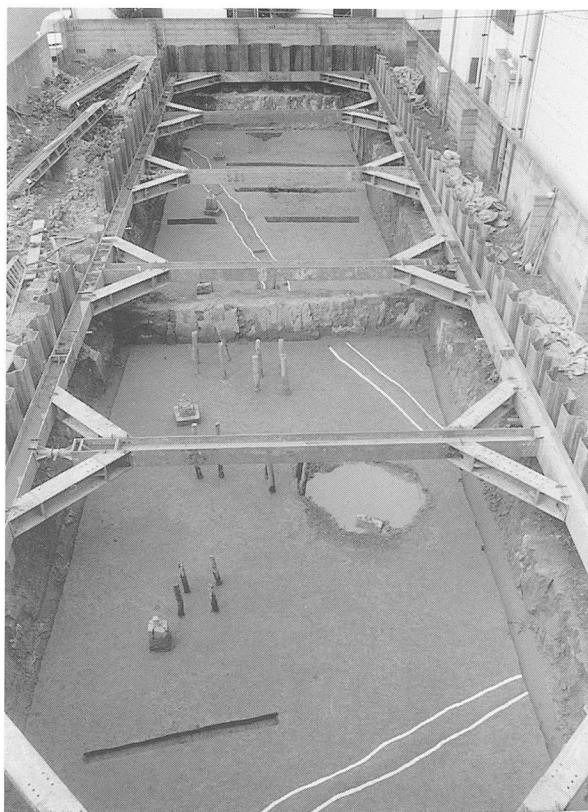


P 1



P 1 出土遺物

図版第4



弥生後期面（南半部・南から）



弥生後期以前面（南から）

## 報告書抄録

ふりがな	だいくなかみちいせきはつくつちょうさがいほう							
書名	大供中道遺跡発掘調査概報							
副書名	岡山市公用車立体駐車場建設工事に伴う発掘調査							
編著者名	河田健司							
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化課							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 tel 086-225-4211							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °〃〃	東經 °〃〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
だいくなかみちいせき 大供中道遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 だいく いっちょうめ 大供一丁目 7-123	市町村 33201	遺跡番号 -----	34度 39分 2秒	133度 33分 41秒	1993.3   1993.10	222.613	岡山市公用車 立体駐車場建 設工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大供中道遺跡	生活趾 水田趾	弥生 古墳 中世	土坑 溝 水田畦畔	各時期の土器		弥生時代後期に属すると思われる水田遺構を検出した。		

---

---

## 大供中道遺跡発掘調査概報

—岡山市公用車立体駐車場建設工事に伴う発掘調査—

平成12年3月31日

発 行 岡山市教育委員会  
岡山市大供一丁目1番1号  
製作編集 岡山市教育委員会文化課  
印 刷 (株)創文社

---